

二〇二六年度 フェリス女学院中学校

国語

《注意》

- 一、問題はこれから二十四ページにあります。始まりのチャイムが鳴ったら必ず確認してください。
- 二、問題を解く前に、解答用紙に受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
- 三、答は、すべて解答用紙に書いてください。句読点や記号などは字数にふくめます。
- 四、解答用紙の一行のわく内には二行以上書かないようにしてください。

「一」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

問三A

空気は灰色に染まっていた。乗用車やトラックの排ガスに加え、圧雪が消えた道路の表面をスパイクタイヤが容しなくけずり、黒い粉じんが町の空気をよごしていく。路かたのそこかしこに残っている雪山の表面も、黒くよごれていた。

鈴木雄一は毎年春にはさけられない光景をダンプカーの運転席から見下ろしつつ、札幌のよごれた町中を走っていた。このところ、郊外の土砂置き場と中心部の現場を往復する日々だ。世の中は好景気の余波をうけて未だんまでもあわただしい。ただでさえ残雪でせまくなった道を、乗用車がひしめいていて、車列はなかなか進まない。自然といらいらし、灰皿におしこめられた煙草は山になっていた。

新しい一本をくわえて火をつけ、吸うでもなくくわえたままじゅうたいが動くのを待っていると、対向車線に一台、雄一が乗っているのと同型のダンプが見えた。現場から土砂置き場へと向かう同僚の車だ。いつものようにすれちがいざまに片手を上げるつもりでいた。しかし、前に車はいないのになかなか近づいてこない。雄一が目線を下げると、同僚のダンプの前に一台の荷車がいた。

馬が一頭で引いている荷車だ。さほど大きくない茶色の馬が、どこかゆうゆうと路かたに近いところを歩いている。荷台にすわった老人が一人手綱をとり、その後ろには新聞の束や空きかんなどが見えた。

馬を使つての廃品回収業者とはめずらしいな、今どき。そう雄一がおどろいていると、同僚のダンプからけたたましいクラクションがひびいた。音におどろいたのか、馬はびくりとはね上がった後、歩みを速めてけん命に荷車を引く。老人はあわてふためき、荷台から馬に何事か声をかけ続けているようだ。

荷車はあせりながら雄一の車の横を通り過ぎていった。ぶつかりそうなほどすぐ後ろについていたダンプの運転席で、雄一の同僚が前の荷車を指し、「困ったもんだよ」とばかりに品のない笑い方をしている。

雄一はどこか得意げな同僚の顔をにらみすえる。無意識に煙草のフィルターをかみちぎっていた。すれちがいざま、同僚がこちらの様子におどろいたのち、鼻白んだ表情に変わっていくのが見えたが構わなかった。きっと会社にもどった後で、難くせをつけられるだろう。上等だ。一発ぶちかましてでも、さっきの行為を後かいさせ
てやる。

問十五

自分でもおどろくほどにいきなりが増すのを感じながら、雄一はさっきの馬を思い返していた。路かたを追
い立てられて歩き、排ガスと粉じんによごれ、それでも歩くことを止めなかった一頭の馬の姿を。

○

問六

昭和三十五年。札幌近郊、江別市。

問三B

雪解けと共に土はゆるみ、どろとなったその表面を春の風がかわかしていく。どろと一しよに、雪の中でこ
りついていたひと冬の馬ふんも粉となって風にのり、江別の町中を粉っぽく染めていた。馬ふん風。春の風物
詩というには情ちょを欠いた名とにおいをもつ風だった。

〈注一〉

『鈴木装蹄所』という看板がかけられた木造の家には、広い土間が設けられていた。真ん中には太い柱が四本立
てられている。その柱の間に、筋骨隆々とした大型馬が保定されている。左の脚が蹄の裏側をさらすように折り
曲げられ、柱のうち一本にしっかりとしばり付けられていた。

保定された馬の鼻息がひとつ、ぶふうとごう快な音と共にはき出された。次いで、ぶるると鼻を鳴らすしん
動。ふだんは黒くうるんでいた目は、きん張からか白目をむいていた。その白目も今はじゅう血さえしている。

「そんなきん張すんな。熱いわけでないし、お前の脚にいいことするだけだ。すぐ終わるから」
問七

雄一は馬の顔に手をのばすと、その鼻先にふれた。いつもはふにふにとやわらかい皮だが、きん張からこわ張っているのが分かる。それでも、表面に短く密生した毛の感しよくを楽しむように、雄一は馬の鼻をなで続けた。

馬の後ろでは父の陽一（注2）がやっところでおさえた蹄鉄（注3）にギン、ギンと音を立てて金槌かなづちをふりおろしている。だいたい色に焼けていた鉄は徐々に温度を下げて白くなり、すぐにふつうの鉄色を取りもどす。それまでに手早くたいて蹄鉄を馬に合った形へと変える。

「よし。いいな」

額を流れるあせをぬぐうこともないまま、陽一は再び蹄鉄を窯かまにくべる。（注4）ふいごでいく度か風を送り火力を強めると、またすぐに蹄鉄は真っ赤に焼けた。それを、やっところでつかんで馬に近寄る。警戒した馬が耳をねかせた。

「なんも、お前、冬前に初めて鉄はいた時にもやったべよ」

雄一が馬の鼻づらをなでてやっているうちに、父は熱した鉄を蹄の裏側へとおし付けた。

とたんに、じゅううという音と共に白い蒸気が上がる。土間にはかみの毛を焼いたような臭気しゅうきがじゅう満した。

「ほれ、だいじょうぶだべ、熱くないべ？」

陽一が折り曲げた脚をぽんとたたくころには、蹄鉄はもう鉄本来の色にもどって蹄の裏に圧着されていた。

「鈴木さんに冬に打ってもらった鉄のおかげで、こいつ冬道でも足すべらさんでよく働いてくれたわ」

土間の上がりかまち框にこしかけていた馬の主が、煙草をくゆらせながらのんびりと言った。

「いい馬だもの。ただ、ちょっとつめののびにムラがあったから、鉄打つ前に丁度良く切っておいたよ」

陽一は手ぎわ良く作業をしながら、馬主と気楽に会話をする。蹄鉄を熱で圧着した後は、くぎで固定しなければ

ばならないのだ。カン、カン、と小気味いい金槌の音がひびいた。

「どうさ大将、最近いそがしいんでないの」

「まあなあ。冬のすべり止めつきの鉄から、夏用の鉄にかえ時だからなあ。馬ひっきりなしに引っ張られて来るわなあ。今日はまだだけど、いつもだったら家の前に順番待ちして馬並ぶわ」

「近ごろは、ありがたいことにおれら馬搬（注5）の人間は景気いいから。前だったら冬の鉄だけつけたけど、夏にも鉄打ってもらって馬ば大事に使わねばね」

「そう言ってもらえると鉄屋はありがてえけどな」

鉄屋とは蹄鉄屋のことだ。雄一の父、鈴木陽一は、頑固がんだが堅実けんじつなうで前が評判となり、遠くからも馬を連れて来る農家や馬搬の業者が後を絶たなかった。

おりしもこのころの江別では、耕作に馬を使う農家はもちろんのこと、特に土じょう改良とレンガ作りのための土運搬や、パルプ工場のための原木切り出しなどの産業で馬が大活やくしていた。

馬に關係する商売も花ざかりで、馬喰ばくろ、馬具屋、そり屋などがあり、特に装蹄師は馬の働きに直接關係があるため、重宝されている。彼らかれは単に馬に蹄鉄を装着するだけではなく、つめをけずって歩行のくせを改善したり、

病気を事前にやわらげたりと、馬の健康管理のためにも重要だった。

十勝としかちで装蹄を学んだ父・陽一は、独り立ちしてここ江別で装蹄所を開いた。うでが良かったため、何人も弟子でし志願者がおとずれるが、妻が一人息子むすこの雄一を産んだ際になくなっていたため手が回らず、住みこみにさせる訳にはいかない。

なにより、本人が人に教えるよりも自分の仕事をじゅう実じょうじつさせたいという性分もあり、弟子もとらないままで職人しやくじんを続けていた。独りであっても、一頭一時間はかかる作業を一日十頭以上も手がけるなど、繁忙期はんぼうきは特にわ

き目もふらず働き続けていた。

問一

母を知らず、しかし働き者の父にきつちりと育てられた雄一は、陽一の作業をそばでながめたり、馬の飼い主らから話を聞くのを楽しみとしていた。春に小学校の五年に進級し、現実味を帯びて自分の将来を考えるようになった今、自分も「鉄屋」としてあとをつぐのだと当然のように思っていた。

一本目の装蹄を終え、「これは痛いことをされているのではない」と理解したらしき馬は、おとなしくなった。雄一が「よしよし、お前えらいな」と馬のかたをなでていると、外から「ごめん下さい」と声がした。

「おう、新しい客が来たな。雄一、おれまだ手えはなされねえから、待っていて言いに行け」

「はい」

父に言われて土間から外に飛び出すと、春のにおいがする。馬ふん風あらしのにおいと、外で主と一しよに待っている生の馬のにおいだ。農家らしいほかむりをした男が、小ぶりだが目つきのきつい道産子どさんこを連れていた。

「すみません、今打っているのがもう少しかるんで、待ってもらえますか」

「おう、ここで待たしてもらうよ。うちの馬、氣いあらくてなあ。恵庭えにわの鉄屋じゃあつかえねえのよ」

「恵庭からですか。遠くからなのにすぐできず、すみません」

「なんもなんも。ここの鈴木さんだら、きかねえ馬でもやってくれるっちゃうて聞いたもんだから来たのさ。いくらでも待つよ」

男は慣れたふうでふところから煙草を出した。雄一は一礼すると、土間のストープにのっている薬缶やかんから茶を淹いれる。上がり框で待っている客に一ぱいすすめ、外の待ち客にも茶を持って行くと、先ほどの馬に加えてさらに二組も客が待っていた。

「父ちゃん、お客二頭増える」

「その人らにも、悪いけど待ってるよたのんでくれ。せかされたからって、手えぬく訳にはいかねえからなあ」
「そうだそうだ。せかして温い仕事されるぐらいなら、少しぐらい待っても、いい鉄ば打ってもらったほうがよっぽどいいわな」

茶を飲みながら、馬主はそう言ってごう快に笑った。

陽一が真面目^{まじめ}一辺^{間二}どうの職人だということは知れわたっている。雄一は父が酒を飲む姿をほとんど見たことがない。自宅で晩しゃくをする習慣がないのだ。

かつて雄一は、同級生の父親の多くが一日の仕事を終えると飯の前に一ぱい飲むらしいと知り、なぜ酒を飲まないのか、きらいなのか、^{〈注〉}下戸^{げこ}なのか、父にしつこくきいたことがある。父は少し困ったように笑った。

「きらいな訳でないし、量も飲める。ただな、父ちゃんは鉄屋だ。いつ何時、つめに問題があるからと馬が持ちこまれるか分からんだろう。そんな時に、酒によっぱらった状態でつめ切れるか？ 鉄ば打てるか？」

「よっぱらわない程度になら、ちょっとなら、飲んでもだいじょうぶなんでないの？」

「たとえ手元がくるわなくて済む程度の酒でもな、後々、馬の脚に難くせが出た時、あの時酒飲んだからだと思いたくねえんだ」

そう笑って陽一は自分の二のうでをたたいた。やっとこでおさえ、鉄を打つ父のうでは農家の男達にひけをとらず太くたくましい。その父親がほこる職責を雄一は完全に理解できないまでも、その頑固さにただうなずいた。そして、遠くからでも馬を連れて来て、何時間でも待ってくれる馬主の信らいを何によって得ているか、子ども心にもしかと学んだのだった。

馬ふん風が少しおさまり、雄一の通う小学校でも新学期開始のころよりも校内が落ち着いてきた。気こうもおだやかで、子ども達は短い休み時間をおしんで校庭に飛び出しては体を動かす。

学校が校庭の片すみに所有する畑もしばれがぬけ、耕す時期になった。学習用の畑とはいえ、戦時中に食りよう増産のために拡張された土地だったため、かなりの広さがある。教員や児童の手だけで耕しきれるものではなく、春のこの時期、学校近くの御木本^{みきもと}という大きな農家の主人が、馬を一頭連れて耕しに来てくれている。

子ども達は毎年、馬が学校をおとずれる日を楽しみにしていた。特に雄一は自分の家で御木本の立派な馬の鉄を打っていることもあり、力強くプラウを引く姿が我がことのようにほこらしく思えるのだった。

「あの、今年は小学校の畑、いつ耕しに来られますか？」

御木本の主人が所有する重種馬^{じゅうしゅば}の鉄をはきかえに来た日、雄一は目をかがやかせてきいてみた。

「ああ今年なあ。学校の先生がたがいそがしいらしくて、来週の土曜以外は都合が悪いんだと。けども、おれの方もその日は音更^{おとふけ}に馬買い付けに行く約束あるから、馬ば先生方に貸して、あとは自分達でやってもらうことにしたわ」

「そうなんですか。馬はこの馬ですか？」

「いやこいつは音更に持ってって馬市で売るのはさ。先週、ここで夏用の鉄にかえてもらった茶色のブルトン^{ブルトン}いたろ。去勢の。あれ貸すわ。去年も一昨年も小学校連れてったやつだし、馬も慣れてるから、だいじょうぶだべ」

「はあ、そうですか」

御木本のいうブルトン種の馬は雄一にも覚え^{おぼ}があった。重種馬特有の、筋肉のかたまりのような巨体^{きよ}と子ども^{注11}の両掌を合わせても足りないほど大きな蹄を持ちながら、とてもおだやかな気性の馬だ。

雄一は御木本があゝの馬と慣れた様子ですると畑を耕していく姿を期待していたため、少々気落ちした。しかし、言われた通り先週末にあの馬は小学校の畑に慣れているのだし、だいじょうぶ。何の問題もないだろう。その時はそう思っていた。

土曜の午後、授業が終わってから、雄一の担任である林教諭が御木本の家から件の馬を引いてきた。林はまだ若い、実家が農家で、幼いころから馬耕には慣れているのだと、大層自信があるようだった。実際、馬も安心したように落ち着いて彼に引かれている。

前日の夕方は雨が降ったが、この日は朝から晴れていた。畑のはしで、学校が所有するプラウを馬に装着し、準備は整った。そばでは児童や教員が固唾を飲んで見守っている。子ども達の中には農家の子も多かったが、慣れているはずの馬耕でも、学校の畑が耕される様子がおもしろいのか、目をかがやかせていた。

「じゃあ、これから先生が耕しますからねー。みんなよく見ておくようにねー」

自信満々の様子で、林は子ども達に声をかける。馬はそれを合図と心得ていたかのように、鞭を入られる前に畑を進み始めた。林があわててプラウの先を土にさす。

馬の静かな歩みに合わせて、みるみるうちにプラウがかたい土に食いこんでいく。後には、土くれがあらく梳かされたように地面に盛り上がっていた。一冬をこえて固くしまった土であっても、こうしていく度か往復すれば、土くれが細かくくだけ、中に適度に空気が入り、作物を植えるに適した畑になるはずだった。

すごい、とか、がんばれお馬さん、といった声えんが子ども達から送られる中、雄一はひそかに例年とはちがう印象をいただいていた。

とてもへたな耕し方だ。プラウは安定していないし、馬が歩くに任せっ放しで、土のかたいところやわらかい

ところに合わせてかん急を付けられていない。当たり前だが、馬の主である御木本のおやじさんが耕した方がずっと上手だ。

しかしそんなことを口に出せるはずもなく、林が危なっかしいくせに得意げな表情で馬をあやつるさまを、雄問八一はかたい表情で見守っていた。

「よいしい調子だ。あれ、ちょっと待てよ」

急に馬が止まった。プラウからのていこうが大きくなったようだった。昨日の雨を得てねばりがちの土に加え、プラウの角度が深すぎたせいだった。

「あれ。こうか、もうちょっと、こうか」

林はプラウの調節をし、これでよし、と馬に長鞭ちょうべんを入れた。馬は一步動き、また止まる。

「どうした、だいじょうぶだから、このままさっさと歩けつてば」

なおも一度、二度と鞭が入られる。児童からは、「がんばれ、がんばれ」「へぼ馬か、ちゃんと引っ張れやあ」と無じゃ気な応えんと野次が飛ぶ。

「歩け、ちゃんと行けつていうのに！」

林は顔を真っ赤にして鞭を打った。馬は観念したようにひとつ大きな鼻息をはいた。それから、全身の筋肉をぐっとこわ張らせて前にふみ出す。いつの間にか浮いたあせが、腹の方まで垂れていた。

そのしゅん間だった。

べきり、と低い音がひびいた。太くかたい木材が、非常に強い力で一気に折れる音に似ていた。そこにいるほとんどだれもが、プラウのしん材が折れるか破損した音だと思った。雄一だけが、その音を聞いて全身を粟あわだ立たせ、思考を完全に停止させていた。

人々の視線がプラウに集中する中、馬がいきなり前方にたおれた。つんのめるように前脚を折り、そのままズンと音をひびかせてその巨体を土に横たえたのだった。

「あああっ」

最初に声を上げたのは雄一だった。続いて、児童達の悲鳴が上がる。その声の合間に、馬のじん常でなくあらゐ吐息がひびいた。体を横たえたまま、四肢をばたばたと大きく動かし暴れている。左前脚の先で、蹄が明らかにおかしな角度をえがきながらぶらぶらゆれていた。

「けられる！ 危ないから、近寄るんでない！」

馬にかけ寄りそうになる子ども達を、教師らがあわてて制した。プラウをあやつっていた林は、顔面そう白でふらふらと馬に近づこうとし、同僚の一人に体当たりされてその場にしゃがみこんだ。

問九

やまぐち

「だれか、山口さん呼んで来て！ あと御木本さんにしらせて！ 早く！」

何も思考にのぼらないままで、雄一は気づくとあらん限りの声でさけんでいた。足の速い同級生が近りに住む獣医師を呼びに走り、教師の一人はバイクに乗って馬主の家にしらせに行った。残された子どものいく人かは泣きさけんでいた。

雄一はぼう然と馬の背中側にたたずみ、馬を見続けた。先ほどの木が折れるような不吉な音と、立てずにもかく馬をぐっしょりとぬらすあせが頭の中で結びつき、これから大人達が下すであろう決断をおもった。

問十

人間達が右往左往する中、横たわった馬はひたすら中空と地面とをむなしくかき続ける。折れていない三本の脚が土にふれ、蹄が表面をけずり、畑の上には三つのあとが半円状に刻まれ続けた。

その日の夕刻、雄一はかたを落として帰宅した。

「お帰り。おそかったな」

父親は仕事を終えたばかりらしく、土間の上がり框で新聞を読んでいた。雄一がただいまの代わりに深く重いため息をつく、父は新聞から頭を上げた。

「どうした。元気ねえな」

「父ちゃん。御木本さんとこのでかいブルトンいたろ、栗毛^{くりげ}で、玉ないやつ」

「ああ、あの大人しい年寄りがどうした」

「今日学校の畑ば耕しに来て、脚折った」

陽一は大きく息をのむと、ゆっくり新聞を置いた。

「御木本の親父さん、音更の馬市行ってるはずだろ。だれが馬、引かせた」

「担任の林先生。プラウ使うのあんまり慣れてないみたいで、うまくいってなかった」

「で、馬は。だめだったのか」

「だめだった」

雄一はうなずくと、つい数時間前に目の前で起こった出来事をぼつりぼつりと語り始めた。

かけつけた獣医師は馬をひと目見るなり、首を横にふった。御木本の家に行った教員は、留守番をしていた御木本の妻から、馬を楽にしてくれという指示を得た。山口先生がいるなら、薬を使って早く処置してやってくれという言付けと共に。

そのころには、児童のほとんどは帰宅していた。雄一はその場に残った。

問十一

ア

が

半分と、
てその場に居残った。が残り半分で、顔色の悪い林教諭に帰るようながされても、頑とし

もがく馬の動きはすでにかんまんになっていた。呼吸が速く、大きな腹がせわしなく上下する。流れ落ちるあせは次々と地面に吸いこまれていた。

山口獣医師は教師に言ってバケツに水を用意させると、自宅から持参した容器の中身を混ぜた。よく攪拌かくはんすると表面にあわが立つ。色はほぼ透明なままだ。それを、子どもの手首ほどの太さの注射器いっばいに充填じゅうてんし、馬の背中側に立った。

「いいんですね」

ふり返り、一度だけ山口獣医師は言った。その場の責任者である校長が、無言のままうなずいた。

「では」

若い教師三名が馬の頭側に回り、力のうすれた馬の頭を地面におさえつけた。なおも脚が宙を泳ぐが、もうさほどの力強さはない。おさえつけた教師のうちの一人は林だった。流れるなみだもそのままに、顔を真っ赤にして馬のあごを地面におさえ続けている。

山口獣医師はゆっくりと馬の首に注射針をさし、中身を体内に注入していった。針をぬくころには脚の動きはさらにゆっくりになり、あらい呼吸で上下していた腹も停止した。「もういいですよ」という合図で教師たちがはなれるころ、馬は完全に事切れていた。

雄一が事のしょう細を語り終えるまで、陽一は一言も口を出さず、ただうでを組んで下を向いていた。少しだけためらってから、雄一はどうしても父にたずねたかったことを口にする。

「あの馬、もともと脚、悪かったの？」

「さあな」

簡素に過ぎる答えに、雄一は呆氣にとられる。あつけこう議の声を上げようとすると、さえぎるように父は口を開いた。

「脚に問題があったかなかったかと言えば、あったさ。ただ、あれぐらいの年れいまで使われた馬ならみんな、何かしらけがなりつめに障害をかかえている。人間だってそうだろ。年をとれば痛みやつらさをうったえてばかりだべ」

「そうだけど……」

聞きたかった答えはそうではない。今回の馬のけがはあらかじめ原因があつてのことなのか、それとも学校での使い方が悪かったためなのか。たとえ自分が直接馬の死因に関わってはいないのだとしても、雄一は父の口から明確な答えがほしかった。

「なんか、割り切れない。なつ得できないよ」

「なつ得、か。御木本のおやじさんが引かなかったことも、原因ではあるかもしれない。でもそれだけでない。馬は、どうしたって死ぬ。みんながなつ得できる死に方なんてめっ多にない。だれかが一人で悪いわけでない」

問十三

陽一は新聞を折りたたんだ。二つ折り、三つ折りど、もう折れなくなるまで手の中でもてあそびながら、

「だれかだけが悪いわけでない」

もう一度、そうくり返した。

労役えきに使われる馬達は、重労働と過労のためにつめや関節に問題をかかえていることも多い。父は明らかに使役が過ぎる馬を見ぬいているようだが、それを馬主に直接指てきしてたしなめるようなことはない。

「馬を使いすぎているのは馬主自身もよく分かっている。だが生活のためにはやむを得ないのだから、鉄屋こそ

が馬の負担を軽減してやればいい」。父は過去に一度だけ、雄一にそう語ったことがあった。

問十四

雄一はかつて言われたことを思い出しながら、馬にたずさわった者として責任の一たんを静かに負っているような父の姿を見、それ以上は何も口を開けなかった。

(河崎秋子『土に贖う』所収「うまねむる」)

〈注1〉牛馬に蹄鉄（蹄がすり減ったり傷ついたりするのを防ぐU字形の鉄）をつけること

〈注2〉熱した金属をはさみもつ道具

〈注3〉注1参照

〈注4〉火をおこすのに用いる送風器

〈注5〉馬を使って山からばっ採された木を運ぶこと

〈注6〉馬や牛のことにくわしく、またその売買などを職業とする者

〈注7〉北海道産の馬

〈注8〉酒が飲めない、または酒を好まない人

〈注9〉牛馬やトラクターにつけて用いる、土地を耕すための農具

〈注10〉フランス、ブルターニュ地方原産の馬の一品種

〈注11〉両方の手のひら

問一 部「きっちりと」と同じ意味で用いられているものを選びなさい。

- 1 庭の木がきっちりと二メートルになった
- 2 作った料理を重箱の中にきっちりとつめた
- 3 あみ戸に虫がきっちりと張りついていた
- 4 計画にそって仕事をきっちりとこなした

問二 部「一辺とう」の文章中の意味としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 とりかえがきかないこと
- 2 すっかり定着していること
- 3 ひとつの方向だけにかたよること
- 4 ひとかけらのすきまもないこと

問三 部Aと部Bにはどちらにも北海道の春の空気が描写されています。後の問に答えなさい。

- ① AとBにおいて空気を染めていたものは何ですか。それぞれ二つずつぬき出しなさい。
- ② BからAへ時代はどのように変わりましたか。

問四

——部「すれちがいさま、同僚がこちらの様子におどろいたのち、鼻白んだ表情に変わっていくのが見えた」とありますが、このときの「同僚」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 仲間の雄一が混雑する対向車線にいるのを見つけ、雄一のいらいらをまぎらわしてやろうと荷車をだしにしておどけてみせたが、全くじょう談が通じずかたぶつの雄一に反発を覚えている

2 道はばがせまいため、自分の前方でゆうゆうと進む荷車を追いこすこともできずひどくいらだっていたが、雄一の方が自分よりもいらだっていることに気づき庄とうされている

3 車がひしめく町中で廃品を回収しているみすばらしい老人の存在を目ざわりに感じ、仲間の雄一にうったえようとしたが、雄一に厳しくとがめられた気がして落ちこんでいる

4 交通の流れをさまたげる時代さく誤の荷車にあきれる気持ち仲間雄一と共有しようとしたが、予想に反して雄一からこうげきの態度をとられ、不快になっている

問五

——部「さっきの行為」とありますが、どのようなことをしたのですか。三十字以内で書きなさい。

問六

——部「昭和三十五年」の「雄一」について答えなさい。

①「雄一」は何年生でしたか。

②「雄一」は何人で暮らしていましたか。

問七

——部「雄一は馬の顔に手をのばすと、その鼻先にふれた。いつもはふにふにとやわらかい皮ふが、きん張からこわ張っているのが分かる。それでも、表面に短く密生した毛の感しよくを楽しむように、雄一は馬の鼻をなで続けた」とありますが、この様子から「雄一」についてどのようなことがわかりますか。

1 ふだんから父の仕事の手伝いを通して馬の状態のびみょうな変化を理解しており、馬に対して人一倍いとおしさを感じていること

2 まだ子どもなので蹄鉄の作業自体に関わることはできないものの、将来の後継い者として馬をあやつる力はあるのだと自負していること

3 蹄鉄をつけることが馬の体にたいへんな苦痛をあたえたとわかっている、人間の生活にふり回される馬をふびんに思っていること

4 お客さんの大事な大型馬にさわれるのは父が危険な作業をしている間だけなので、思う存分大好きな馬の面どうが見られて興奮していること

問八

——部「雄一はかたい表情で見守っていた」とありますが、このときの「雄一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 実力もなく馬の気持ちもわからないのに、やたらと自信ありげに馬を働かせようとする林がにくらしく、いかりをこらえている

2 馬のあつかいに慣れていない者が下手な耕し方をこのまま続けたら、馬にとって何かよくないことが起きるのではないかと危ぶみ、きん張している

3 農家育ちで馬耕に慣れているというわりには林が馬の自由に任せすぎるので、これなら自分がやると言えよよかったと後かいし、気落ちしている

4 子どもたちはともかく、大人がだれ一人耕し方がまずいと指てきせず、ただはたかながめていることに不満がつっている

問九 — 部「『だれか、山口さん呼んで来て！ あと御木本さんにしらせて！ 早く！』何も思考にのぼら

ないままで、雄一は気づくとあらん限りの声でさけんでいた」とありますが、このときの「雄一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 一刻も早いけがの回復を願って無我夢中で助けを求めている

2 馬にけがをさせた林へのいかりがばく発し、無意識に大声を出している

3 馬にたずさわる者として今何をすべきかが反射的に口をついて出てきている

4 冷静さを欠いた大人たちにはもはや馬を任せられず、自発的に指揮を取っている

問十 — 部「これから大人達が下すであろう決断」とはどのような決断ですか。十字以内で書きなさい。

問十一 —

ア	・	イ
---	---	---

 にあてはまるものをそれぞれ選びなさい。ただしア・イの順序は問わない。

1 自分の家と縁を持つ馬を身内のように思う気持ち

2 馬を救い出す方法をなんとか見出して役立ちたいという気持ち

3 これ以上学校の不手際をだまって見のがすまいという気持ち

4 自分達の学校で災禍にあった馬を見届けようという気持ち

5 大切な命が人間の身勝手な都合でうばわれるようでは得がいかない気持ち

6 もだえ苦しむ馬の姿に蹄鉄屋のあとつぎとして動じてはいられないという気持ち

問十二 — 部「『さあな』簡素に過ぎる答えに、雄一は呆氣にとられる」とありますが、このときの「雄一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 馬で商売をしている父に馬のけがの前兆とけがによる損害について聞いたのに、興味が無さそうな返答であったので、あてが外れてひょうしめけている

2 馬の状態を熟知しているはずの父にけがの原因を示してほしかったのに、無責任にも思えるような父の返答を聞きあまりにも意外で、気持ちのやり場がなくなっている

3 馬に関わることを家業としている父にだれが馬のけがの責任をとるべきか遠まわしに聞いたのに、適当にはぐらかされ、やっかいな問題から目をそらそうとする父の態度にとまどっている

4 馬を常日ごろ愛している父に可愛いそうな馬の死因を聞きたかったのに、死馬にはもう関心を持つなど言わんばかりの父の返答を聞いてしうげきを受けている

問十三

——部「陽一は新聞を折りたたんだ。二つ折り、三つ折りと、もう折れなくなるまで手の中でもてあそびながら、『だれかだけが悪いわけでない』もう一度、そうくり返した」とありますが、このときの「陽一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 将来あとをつぐ息子には、年若い馬を使役する馬主の苦しい気持ちも、馬にけがを負わせてしまった教師のつらい気持ちも、どちらも思いやれる人間に育ってほしいと教えさそうとしている

2 生き物はすべていずれ死をむかえるものであり、死に方についてとやかく言えるものではないと息子に語りながらも、心のうちではどうにもやりきれない悲しみをかみしめている

3 自分が関わったことのある馬の死になかなか納得できずにいるものの、もういなくなった馬にこだわりの続けては次の仕事に進めないと気持ちを切りかえようとしている

4 馬のことをよく知らない教師たちのあさはかな所業によって馬の命が失われたことにいかりがこみ上げ、一方で事故を防げなかった自分の無力さにもうちのめされそうになっている

問十四

——部「雄一はかつて言われたことを思い出しながら、馬にたずさわった者として責任の一たんを静かに負っているような父の姿を見、それ以上は何も口を開けなかった」とありますが、このときの「雄一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 長年にわたり心をこめて面どうをみてきた馬がいなくなって深く悲しむ父の本心を知り、息子として何とか力づけてあげたいと思うものの、かける言葉を簡単には見つけられずにいる
- 2 蹄鉄屋としての分をわきまえ、馬主の処置に口出しすまいと自分を律する父の姿に圧とうされ、馬の死に直接関わっていないにもかかわらず大げさにさわぎ立てた自分のおろかさをはじている
- 3 あつかう馬の体の状態や馬主の事情、思わぬ災難から来る苦しみをもすべて飲みこんだうえで、あくまでも馬の命を支えることにだまって徹する父の姿に、職人としての使命の重さを思い知らされている
- 4 馬を過度に使役することやと生計を立てている馬主側を責めることができない父の苦のうを十分に理解しながらも、父の口から死因に関する明確な答えを得ることをあきらめきれないでいる

問十五

「部（2ページ）」とありますが、子どものころの出来事をふまえると、大人になった「雄一」が「自分でもおどろくほどにいきなりや増」したのはなぜだと考えられますか。

- 1 馬は人々にとって時代おくれの道具でしかないものでも、雄一にとっては人間の暮らしをけなげに支えてきた大切にするべき存在であり、同僚が馬をじゃ険にあつかうのが許せないと思ったから
- 2 馬と長い間過ごしてきた雄一は、馬は人と心を通わすことのできる生き物であることをよく知っている
- 3 かつて馬をおどして心身ともにきずつけた同僚の行為があまりにもむごいと思ったから
- 3 かつて馬を助けることができず見捨てた苦しい思い出がある雄一は、罪悪感から馬を二度と苦しめたくないと強く思っており、馬に乱暴をはたらく同僚の行為を見過ごしがたいと思ったから

4 馬は大きくじょうぶそうに見えても、雄一にとってはせん細でしん重に世話する必要のある愛らしい存在であり、馬を危険な目にあわせる同僚が横暴だと思ったから

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

ある場で取材をうけていたときに、居合わせたカメラマンが、ちょっといいですかと話しかけてきた。ちょうどわたしは取材のなかで、たった一行ですべてが変わってしまうような言葉に出会うことについて話していた。そんなわたしにカメラを向けていたひとが、自分にとっての言葉を伝えたくなくなってくれたのだ。

「こういうの、全然よく知らないんですけど」とそのひとは言った。「たまたま出会ってしまって、そこから頭をなぐられたようになって、もう忘れられなくて」。手元のスマホを、人差し指でつついとおつついている。その言葉に出会ったとき、あまりのしょうげきで写真をとったのだという。写真はすぐに見つかった。本当に最近のことなのだろう。これなんです、とそのひとは、事件現場を目撃してしまったような表情で、わたしにスマホを手わたした。そこには、わたしも出会ったことのある、うつくしい言葉が並んでいた。

かなしみ

あの青い空の波の音が聞えるあたりに

何かとんでもないおとし物を

僕ははしてきてしまったらしい

透明な過去の駅で

遺失物係の前に立ったら

僕は余計に悲しくなってしまった

言葉がわたしに届き終え、顔をあげると、そのひとは真けんな表情のままだった。「すごくないですか。もう、何がすごいのか、わからないんですけど」。これはすごいですねえ、とわたしも応答した。これまで読んできたよりも、ずっと心のおいところまで言葉がきてしまったように感じた。そのひとは、何度もうなずいて「谷川俊太郎さんっていうひとがこれを書いたみたいなんですけど」と言った。

問一

わたしは、胸をつかれた。このひとは、谷川俊太郎に出会ったのだ。谷川俊太郎は、おそらく日本でもっとも有名な詩人だろう。知らないひとは少ない。そのひとも、名前は知っていただろう。だが、このひとは谷川俊太郎の言葉に「出会った」。そこにわたしは立ち会えたのである。なんて幸運なことだろう。

問二

そして同時にこうも思った。谷川俊太郎とは、まだ されるのか、と。言葉はあまりにも多くのひとに

問三

ふみしめられると、くずれてくる。口の中がかみしめられつづけて、味がしなくなることもあるし、路上にはき捨てられてしまうことだってある。それなのに、まだ、これほどまでにするどくひとりの生に差しせまり、存在をおびやかすほどにかがやくのだ。このとき、谷川俊太郎はもうこの世にいなかった。それなのに、言葉はどくどくと脈打って、わたしたちの目の前にあった。

(永井玲衣『図書』所収「出会う」)

問一 — 部「わたしは、胸をつかれた。このひとは、谷川俊太郎に出会ったのだ」とありますが、ここでの

「出会った」とはどのようなことですか。次の説明の【 】に入る内容を三十字以内で書きなさい。

ただ単に詩人の存在を知ったということではなく、
【 に出会ったとい
うこと。】

問二 にあてはまるものを選びなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|----------------------|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 記憶 <small>おく</small> | 2 | 尊敬 | 3 | 評価 | 4 | 発見 | 5 | 探求 | 6 | 消費 |
|---|----------------------|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問三 — 部「言葉はあまりにも多くのひとにふみしめられると、くずれてくる。口の中がかみしめられつづけて、味がしなくなることもあるし、路上にはき捨てられてしまうことだってある」とありますが、わかりやすく言うところのどのようなことですか。三十字以内で書きなさい。

問四 本文中の詩を読み、あなたにとっての「何かとんでもないおとし物」について二百字以内で書きなさい。

【三】 次の各文の~~~~部を修飾しよくしている部分を記号で一つ答えなさい。

- | | |
|---|--|
| 1 | 祖母が <small>ア</small> 作った <small>イ</small> ワンピースを <small>ウ</small> 着て <small>エ</small> コンサートへ <small>オ</small> 行く。 |
| 2 | だれにも <small>ア</small> 気づかれない <small>イ</small> うちに <small>ウ</small> 兄は <small>エ</small> 出かけ、 <small>オ</small> 遠くへと <small>カ</small> 向かった。 |
| 3 | しんしんと <small>ア</small> 雪の <small>イ</small> 降り積もる <small>ウ</small> 様子を <small>エ</small> 窓から <small>オ</small> ながめる。 |
| 4 | やはり <small>ア</small> あの <small>イ</small> 人の <small>ウ</small> 言った <small>エ</small> 内容は <small>オ</small> 真実だった。 |

〔四〕 次の――部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

ゲッ|カン¹の雑誌

薬の|コウノウ²

ナン|キョク³の観測

四則|エンザン⁴

ソウ|コ⁵にしまう

殺風景な|オフィス⁶

見境の|ない言動⁷

時を|経る⁸

（問題は以上です。）

＊問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一般的に使われている漢字またはひらがなに改めるか読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたりけずったりしたものもあります。

ここは余白です。

国語

番 号
氏 名

問一		問二		問三①A		問三②B		問四	問五	問六①	問七	問十	問十一
										年生	問八		ア
										人	問九		イ
													問十二
													問十三
													問十四
													問十五